



万葉集にみられる土木用語

坂元左馬太*

1. はじめに

万葉集の研究者でもなく、まして歌などつくる私でもないが、最近万葉集全 20 巻を通読する機会があった。そのときメモしておいた土木用語、あるいはそれらしい言葉を報告したい。

通読したのは佐々木信綱編「新訓万葉集」上下 2 巻である¹⁾。万葉集は周知のごとく雄略天皇代（西暦 470 年）から涼仁天皇代（759 年）ごろまでの間によまれたものを「奈良時代の末（おそくとも平安時代のごく初め）のころ」に編成が行なわれたものである。したがって、1400～1500 年前の日本人が使っていた言葉の中にあらわれた土木用語ということになる。

2. うたわれたもの

構造物、構築物は歌の材料としては、あまりよい対称であると思われなから、それらが歌の中に出現する可能性は少ないであろう。また、編者（佐々木氏によると編者については定説がないということであり、恐らく数人の人）の好みによって、さらにそれが除かれる恐れが多分にあると見られるので、歌にあらわれた土木用語は非常に少なく、道、径、橋等がその主なものである。

3. うたにみる土木用語

以下に記する歌につけた番号は、前述の岩波版の歌の番号である（佐々木氏によると、その番号は国歌大観の歌集部につけられたものと同じ番号である。また（9）の文献の番号も同じ）。

（1）橋

196 飛ぶ鳥の 明日香の川の 上つ瀬に 石橋
（いはばし）渡し 下つ瀬に 打橋（うちはし）渡す
石橋に 生ひ靡ける 玉藻もぞ 絶ゆれば生ふる 打
橋に 生ひををれる………²⁾（長歌・柿本人麻呂）
（注）石橋——石をならべて橋とせるもの、打橋——
一板などをならべ、かけはづしのできるようにつく
った橋³⁾。

2081 天の川棚橋わたせ織女のい渡らさむ棚橋わた
せ。

（注）棚橋——門のごとくかけ渡せる橋⁴⁾ 棚橋は

2361 等にも見える。

3420 上毛野佐野の舟橋取り放（はな）し親は放（さ）
くれと吾は放（さか）るがへ⁵⁾

3824 さしなべに湯沸かせ子とも櫛津（いちひつ）
の桧（ひ）橋より来む狐に浴（あ）むさむ
（注）櫛津——大和国⁶⁾

2644 小壑田（をはりだ）の板田の橋のこぼれなば
桁より行かなむ戀ひそ吾妹（わぎも）

（注）この歌から想像すると、橋は桁と、その上に何等
かの歩行用の路面を設けて構成せられたものであろう。

2997 石上布留（いそのかみ ふる）の高橋高高に
妹が待つらむ夜ぞふけにける

このように橋は多くの人の注意を引いたこと⁷⁾ がうか
がわれ、工法、材料なども見当がつくように思われる。

（2）道、みち、路

193 やたこらが夜昼といはづ行く路を吾はことごと
宮道（ぢ）にぞする

479 はしきかも皇子の命のあり通ひ見しし活路（い
くぢ）の路は荒れにけり （大伴家持）

543 ……吾背子が ゆきのまにまに 追はむとは
千たびおもへど たわやめの わが身にしあれば道
守の 問はむ答も 言ひやらむ………（長歌）

567 周防なる 磐国山を越えむ日は手向よくせよ荒
しその道

576 今よりは城の山道はさぶしけむわが通はむと
思ひしものを

971 ……冬ごもり 春さり行かば 飛ぶ鳥の
はやく来まさね 龍田道（たつたち）の 丘辺の路に
丹（に）つつじの……… （長歌）

3399 信濃道は今の壑道（はりみち）刈株（かりば
ね）に足ふましなむ履著（くつは）け吾背⁸⁾

なお、941, 977, 1149, 1261, 2421, 2777, 3881
等にも道、路等がある。壑道は開壑道であろう。

（3）水路等

1141 武庫河の水脈（みを）早みか赤駒の足搔く激

* 正会員 復興建設技術協会 技術部

(たぎち)にぬれにけるかも

1143 さ夜ふけて堀江こぐなる松浦船掛の音(と)高し水脈早みかも

3302 紀の国の 室の江の辺に 千年に 障る事なく 万世に かくしあらむと 大舟の 思ひたのみて 出立ちの 清きなぎさに…………… (長歌)

4061 堀江より水脈(みをび)きしつづ御船さす賤の徒(とも)は河の瀬申せ

4274 天にはも五百つ綱延(は)ふ 万代に国知らさむと五百つ綱延ふ⁹⁾

なお、1135, 1137 には綱代が見えている。

3263 こもくりの 泊瀬(はつせ)の川の 上つ瀬に い杭を打ち 下つ瀬に 真(ま)杭を打ち い杭には 鏡をかけ 真杭には 真玉をかけ 真玉なす あが思ふ妹も 鏡なす…………… (長歌)

(注)「い」、「ま」は発語(朋下 179 ページ)。杭(古字: 杭は若木のことにて串ともいへりとある。筆者は、い杭、ま杭に特別の意味(たとえば杭の材料の別とか、打ちかたの相違とか)を考えたい。

378 いにしへのふるき堤は年深み池のなぎさに水草生ひにけり

2720 水鳥の鳴の住む池の下樋(したひ)なみいぶせき君を今日見つるかも

(注)この歌の下樋は、池の水中にある水の取り出し口か。

(4) 雑

391 鳥總(とぶさ)立て足柄山に船木伐り樹に伐

り行きつあたら船材(ふなぎ)を

2648 かにかくに物は思はじ飛驒人の打つ墨繩(なは)のただ一道に

4. 終りに

以上素材をならべただけで恐縮ですが、多少とも興味を持たれる方々の参考ともなればと記述しました。

参考文献および注

- 1) 佐々木信綱編:新訓万葉集 上・下(岩波文庫)
- 2) 打橋渡守は 528, 1193, 3907 等にも見える。
- 3) 塚木哲三編:万葉集 上(有朋堂 昭-3, 単に朋・上と記したところもある)69 ページによる
- 4) 朋・上 565 ページ
- 5) この白文は(朋・下 231 ページ)可美都気努。佐野乃布奈波之。登利波奈之。於也波左久禮騰。和波左可禮賀倍
- 6) 朋・下 325 ページ:さしなべ——つるをかけたる鍋にて銚子のごとく口のあるもの 古酒などを暖むるに用いたりとある。
- 7) 石上——大和国山辺郡, なお 金槐和歌集(斎藤茂吉校訂, 岩波(昭-11)中巻に、「かささぎの 羽におく露の丸木橋 踏み見ぬさきに 消えやかへらむ」(源実朝) 実朝は 1213 年から万葉集を読んでいた由, またその下巻に「かち人の渡ればゆるぐかつしかの ままの継橋 打ちやしぬらむ」とある。別に新古今和歌集(明治書院, 昭-11, 尾上八郎著)188 ページに「いかにせむ くぢめの橋の 中空に 渡しも果てぬ 身とやなりなむ」(実方朝臣)等
- 8) 白文は信濃道者。伊麻能波里美知。可里婆彌爾安思布麻之牟奈。久都波気和我世。朋・下 228 ページ
- 9) 綱延ら——大嘗宮の上の方を結び固める綱をいう。なお, 北山茂夫「萬葉の時代」(岩波新書 昭-36)には万葉時代についてくわしく記してある

(1965.3.1・受付)

書 評

建築用語辞典

建築用語辞典編集委員会編

KK 技報堂刊

およそ百科辞典というものは、ただあてもなく眺めていても楽しいものである。

このたび、技報堂から出版された「建築用語辞典」を手にとったときの初感もそういったもので、つまり、百科辞典から建築に関する項目だけを抜き出してハンディな一冊の本にまとめたといった感じがした。

古くは、建築専門家でさえほとんどご存じのないギリシャ神殿や法隆寺にでてくる建築部分の名称や、新しくは、——私の専門分野では——「人工土地」や「地方計画」といった言葉が出てくるという具合で、一般の人達が眺めてもまことに楽しいものにちがいない(残念ながら、近時、建築雑誌等によく出てくるメガロポリスという言葉がなかったが)。

このような雑感はさておいて、辞典を学術書として書評すること、しかも短時間にするということは、盲が象を想像するように困難きわまりない。強いて書評らしきものを書かしていただくならば、7 ヶ年の長期にわたる

編集期間、一流の 50 人の執筆者(編集委員長 渡辺 要氏)、採録用語数 13000 語、図版約 4000 といった豊富さなどから判断しても、また私の専門分野の項目を拝見しても、内容の豊富さと、正確さが感ぜられた。特に巻末の英語索引、フランス語索引、ドイツ語索引、難読語一覧索引、建築設備関係系統図等はかなり有効に利用されよう。ただ、これらの索引の他に、過去現在の有名建築家の簡単な人名録をも加えていただけたらさらに完璧であったと思われるがいかがであろう。

土木と建築とはお互いに建築技術として共通する部分がかかなりあり、日常の仕事のなかでも建築と関連することがしばしばあり、この辞典が土木技術者の仕事の上でも多く、かつ有効に利用されることは確かであろう。

体 裁: B 6 判 1521 ページ

定 価: 2500 円

技報堂: 東京都港区赤坂溜池町 5

電話 東京 583-8581

振替口座 東京 10 番

[日本住宅公団 浅谷陽治・記]